佐世保空襲、連合軍の進駐、そして、立ち上がる市民

# 特集 佐世保、灰燼に帰す

【灰燼（かいじん）に帰す】跡形もなく、すっかり焼けてしまうこと

**1200人以上の尊い生命が奪われ、鎮守府開庁以降、発展してきた佐世保の街が一夜にして廃虚と化した「佐世保空襲」。その後、佐世保は「敗戦」や「連合軍の進駐」など戦後の混乱の時代の中で、市民と行政が一丸となって復興を遂げてきました。その歴史の中には、当時を生き抜いてきた人たちが思い出したくない辛い出来事や、次代に伝えていかなければならない大切な事実がたくさん刻まれています。佐世保空襲から65回目の6月を迎えるに当たり、今回の特集では、昭和20年当時の佐世保の様子を、提供していただいた写真と、佐世保市史などの資料の記載を基に振り返ります。**

## 佐世保空襲

昭和20年4月8日、米軍の大型爆撃機B29が佐世保上空に来襲し、爆弾を投下した。海軍工廠（軍需品を製造した工場）とその境界近くにあった家屋8戸を吹き飛ばし、死傷者100余名を出した。しかし、このことの新聞発表が禁じられ、真相が知らされないまま、口から口へいろいろな尾ひれをつけたデマが飛び、市民に大きな不安と動揺を与えることになった。

4月21日、1機のB29が佐世保上空を通過した。山間部から撃たれた海軍の高射砲の音が轟いたが、その日は何事もなかった。5月23日もまた同様であった。

市民は不安と緊張のうちに6月27日を迎えた。今夜半を期し大々的な佐世保空襲が行われるとの軍情報が入った。市は直ちに町内会等を通じて各世帯にその旨を連絡し、万全の備えをするよう通達した。市民は極度の緊張のうちに防空頭巾や数食分の食糧などを用意した。そして、いつ攻撃を受けても逃げやすいように、モンペを着たまま、ゲートルを巻いて床についた。しかし、その夜は何事もなく過ぎた。

翌6月28日もまた、軍の指令によって市は全市民に警戒態勢を怠らないよう通達した。この日の佐世保は雨だった。「こんな雨の夜には、よもや敵機も来ないだろう」といった幾分の油断が市民の心の底にあった。それでも人々は前夜どおりの準備態勢で夜を迎えた。

夜半過ぎ、突如「グオーッ」という、ものすごいプロペラの轟音が鳴り響いた。人々が驚いて飛び起きたときには、すでに市街の数カ所で火の手があがっていた。雨の中、高射砲がけたたましく鳴り出した。空襲警報のサイレンも断続して鳴った。「グオーッ」という第二波の攻撃がきた。「シューッ、シューッ」という不気味な焼夷弾の音に続いて、火の手がさらに市街のあちこちからあがった。141機（米軍資料）ものB29は合計千トンを超える焼夷弾を投下した。人々はその間隙を縫って、最寄りの防空壕などに避難した。しかし降り続ける「火の雨」に、市民の平素の防火訓練もほとんど効果がなかった。恐怖と混乱の時間は約2時間も続いた。

敵機が飛び去った後、警防団や陸軍、海軍などが出動して消火に努めたが、夜明けまでに焼けるものはほとんどが焼け落ちてしまった。市内の中枢部約一万二千戸が完全に灰燼に帰し、文字どおりの焼け野原となった。被災者は6万人を超え、確認されただけでも1228人（佐世保空襲犠牲者遺族会調べ）の尊い生命が奪われた。

**B29**
太平洋戦争末期から朝鮮戦争にかけてのアメリカの主力大型爆撃機。5千キロ以上を飛行でき、爆弾や焼夷弾などを投下して日本の多くの都市を廃虚にした。

**ゲートル（巻脚絆）**
西洋式の巻脚絆のこと。ズボンのすその乱れを防ぎ、歩きやすくするためのもの。脛の部分にズボン等の上から巻いて使用した。戦時中は一般家庭に普及し必需品となっていた（佐世保空襲資料館蔵）。

**焼夷弾**
目標物を燃やすために開発された爆弾の一種。投下後プロペラ型の信管が作動し、内包された38発のM69子弾が上空で散開。油脂をまき散らしながら飛散し、あたり一面を火の海にした。燃えながら落ちていく様子は「火の雨」と例えられた。M69子弾38発を束ねたE46集束焼夷弾は長さ約1.5m、直径約38㎝、重量約193㎏。1機のB29に最大40発搭載された。

昭和20年9月23日に撮影された佐世保の本通り。人口約30万人を誇った軍港都市佐世保の幹線道路の両側は、見る影もなく焼け尽くされ廃虚と化した。写真は松浦町付近から佐世保駅方面を写したもの。写真提供／芸文堂